

---

## 85 暇

古緑空白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

85 暇

### 【Nコード】

N1000W

### 【作者名】

古緑空白

### 【あらすじ】

とある国のとある王女のリドルストーリー。その結末を少女が決める（あらすじ詐欺）

## 85 暇

ある国の女王様は暇つぶしに殺し合いをさせていました。

それは悲惨でした。殺し合い、と字面の上で表現しても、血の熱さや粘質、生臭さ五感で感じることをダイレクトに想像できる人はいないでしょう。

女王様はそれが目の前で起こっても理解できないのです。

ある時執事にたずねました。

「ねえ、爺。どうしてこんなにも殺し合いがつまらないのかしら？」  
執事は応えます。

「女王様は彼らの殺し合いにご関心がないからなのでしょう」

そう言われ女王様は唸りました。

「確かにそうね。私は彼らが何万、何億、何京死のうともきつと心は動かないのでしょうか」

そこで執事は提案しました。

「誰か、愛する人を殺し合わせてはいかがでしょう？」

女王様はその言葉に怒りました。

「爺、冗談ではすまないわよ」

「ですが、お暇なのでしょう？」

そう言われると女王様は黙ります。

執事は続けます。

「王子様を殺し合いに出向かせたらいかがでしょう？」

「そんな。できないわ」

その言葉にウソ偽りはありませんでした。女王様は王子の事を誰よりも深く愛し、大事にしていたからです。

けれども執事はつづけます。

「女王様、これは芝居です」

女王様は言葉を繰り返します。

それを受けて執事はつづけます。

「庶民どもと剣を合わせて、最後には王子様が勝つ。そうすれば、王子様も助かり、女王様は暇を潰せる」

成程、と女王様は思いました。同時にそれは面白い、と。

さて、そういうわけで王子と庶民とで殺し合いが行われる事になりました。

女王様は一番見ごたえのある場所でその殺し合いを見ました。

王子さまは鎧と盾、そして勇壮な剣を持って挑み、庶民はみすばらしい服に刃毀れた剣を与えられて王子様に挑んだ。

女王様は思いました。ここまでお膳立てされると、やはり退屈である。

そして次の瞬間、女王様は目を疑いました。

王子様の首に剣がつきたてられたのです。

そして、崩れ落ちる王子さま――

「で、で！　続きはどうなるの！？」

「ちょっと、パパ。娘になんて話をしているのよ」

妻の言葉で、ちょっと刺激が強すぎたかなと思う。それでも、私の話はここまでだ。

「綾香、続きは自分で考えてごらん」

「えー」

そういうと、綾香はいやそうな顔をしたけれども妻がつきあってあげるといったのでまた笑顔がこぼれた。

妻と一緒に考えてくれるのならば、バッドエンドにはならないだろう。過大評価ではなく、そう思う。

実はこの話には続きがある。

かいつまんで言えば、執事は反逆者で女王を絶望に落とそうとしていたのだ。

結果、女王はその後見る影もなく落ちぶれていき最後には民衆に

無残に殺されるというものだ。

愉しんで作ったが、私はこの終わり方がつまらないと感じた。

刺激に飽きているのかもしれない、それに子供に聞かせるにしては刺激が強すぎて悪影響が出る。だから、私は綾香の物語が聞きたかった。

私は物語を多く紡いできた。でも、書けば書くほどハッピーエンドからは遠ざかっていった。終いにはバッドエンドの名手、皆殺しという不名誉でもあり名誉でもある称号をいただいた。

物語が評価されるというのは嬉しいものである。けれど、人間は慣れる生き物だ。最近では私の物語に熱を感じられない。感想を聞いても、嬉しいとは感じられなくなってきたのだ。

だから、私は綾香の物語を聞きたかった。

そこにある光を感じれたのなら私はまた頑張れる気がした。

そして、眠ってしまった綾香の物語は妻から聞く事になった。

要点を抜き出せば、女王様は改心し今まで殺し合わせた人たちに謝りに死者の国へ行って、そこで再開した王子に王子の死の真相を教えられ本当に改心し善政を尽くす女王様になった。めでたし、めでたし。

聞き終えたとき、涙が流れた。

これを聞いた時人が感動するのは技術ではないのだな、と痛感した。

「すごいよね、あの子。ほとんど一人でこれを思いついたの」

「ほめてあげたかい？」

もちろんよ、妻は笑顔でそういった。

「……また、バッドエンドの話をかくの？」

「……うん」

でも、その言葉には続きがある。

「でもね、君にも読めるような――救いのある話をかきたいって思ってたよ」

妻は、楽しみにしている、と言ってくれた。

それだけで、僕は頑張れる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1000w/>

---

85 暇

2011年10月9日03時49分発行